

特集

乱視を知ろう！

序 論

雑賀司珠也*

今月号は、乱視を包括的に特集させていただきました。

ご存じのように乳幼児の乱視と弱視の関係や円錐角膜での乱視の問題は古くから眼科医にとって重要な分野でしたし、医学の進歩に相まって、その理解もどんどん深まっています。また、トーリックコンタクトレンズやトーリック眼内レンズも、一般的な治療として広く普及しました。そのため、乱視をどの程度にまで制御することが快適な視機能に結びつくか、我々眼科医にはいっそうの理解が求められていると思います。トーリック眼内レンズの適応については、倒乱視、直乱視、年齢などを勘案して、慎重に考えることが望まし

いと思います。「眼内レンズのトーリック効果は何年くらい続くのでしょうか？」と患者さんからご質問をいただいた先生もいらっしゃるのではないのでしょうか？

一方、眼瞼や今回取り上げていませんが外眼筋の手術でも乱視が変化することがあるといわれています。筆者の場合、小学生の外斜視の前後転手術で翌日から乱視屈折度数が大きく変化した症例を経験しました。術前の説明に屈折変化を含める必要があることを再認識いたしました。

お忙しい日常診療の合間に、ぜひ、今一度、本特集で「乱視の問題点」をレビューしていただきましたら幸いに存じます。

*Shizuya Saika 和歌山県立医科大学眼科学講座